

---

# 黄昏のクロス・ウォーリア～彷徨う旅人～

Mr.Y

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黄昏のクロス・ウォーリアーズ 衍徨う旅人

### 【NZコード】

N2434M

### 【作者名】

Mr. Y

### 【あらすじ】

人類史上最大戦争”The End”終結して500年、再び争いが始まった頃、盗賊に襲われている一人の旅人が傭兵集団、通称”ヴァルキリー”的”ルシウス”によって救われる。旅人に会つた”ルシウス”的”マヤ”は愕然とする。彼は先の戦闘で行方不明になつた恋人と瓜二つの青年だつた。しかし、本人は記憶をなくし、戸惑うマヤ。しかし、時はそんな状況を待つてはくれなかつた。

## プロローグ1（前書き）

この回は、主人公なし、ヒロインなし、とちょっと物足りないです  
が、この作品の世界に入るにとても欠かせない回となっています。  
ここからこの作品が始まるのです。

## プロローグ1

遠い昔、人類の先祖の争いは今から見ればただの喧嘩に過ぎなかつた。素手で殴り、口で咬み付くといった極めて原始的なものである。

しかし、それゆえに彼らは痛みを知っていた。相手から受ける痛みも、相手に与える痛みも彼らは知っていた。だからお互い敵同士だつたとしても同時に助け合うことのできる仲間でもあり、それを持つていたから人類は今まで生き続けることができた。

それはまさに本能と言つてもいいだろう。“共存”という全生物に等しく持つていた本能と。

しかし、人類は他の生物にないものを持っていた。理性という名の諸刃の剣である。

時代が流れ人類は理性を研ぎ澄まし、知恵を身につけた。人類は持てる知恵の限りを注いだ結果、兵器という名の剣を持つてしまつた。しかし、このことを機に人類は痛みを知らない種族となり果ててしまつた。それは退化と言つていいほど悲しい変化だ。

次第に痛みをしない彼らは痛みを恐れ始めた。痛みを恐れるあまり彼らの出した答えは痛みの元をつぶすという単純であまりにも身勝手な方法だつた。こうして人類はお互いの痛みを知らずに在りもしない痛みの元を断つべく無意味な争いを始めた。その度に無垢な人々は戦禍に巻き込まれ、多くの人々に痛みと悲しみを与えた。そして、巻き込まれた人々はやり場のない怒りをぶつけるために新たな争いを生んだ。しかし、無意味な争いが生んだ争いに意味があるはずもなく、結局それもまた無意味な争いに過ぎなかつた。

無意味な争いが増え続けることによつて、人類の争いは急速に拡大の一途をたどつた。人類は“共存”を忘れてしまつたのだ。何度も平和な日々もあつたが、理性に勝つことはなく人々の争いを完全

に消すことはできなかつた。

そしてついに始まつてしまつた人類史上最大規模の争いが地球を、生物を、そして人類を大きく狂わせた。高エネルギーの衝突で地球の温度が上昇し、砂漠化を引き起こす。さらに新兵器の開発実験と戦禍によつて生物のほとんどが絶滅。人類もまた全人口の百分の一にまで激減した。世界は滅びの一歩手前まで追い込まれたのである。

終わつた頃には秩序が崩壊し、国など一つも存在しなかつた。そこには勝者も敗者もなかつた。敢えて言うならば、全人類すべてが敗者だつたのかもしれない。戦後を迎えた彼らを待つっていたものは深い深い爪痕だつた。機械に頼る生活を送り続けた人類にとつて生活レベルが大幅に低下し、しかも高エネルギーの衝突で生み出された世界はまさに灼熱地獄でしかなかつた。このあまりの悲惨さから人類はこの戦争を“この世の終わり”“The End”と呼んだ。人々は自分たちの手で変えてしまつた世界を後悔し、生きる希望を失つてしまつた。

しかし、そんな人類にある救いの手が差し伸べる。それは皮肉にも“The End”によつて生み出された軍事技術だつた。しかし、“The End”を通して痛みを知つた人類は一丸となつて誓いを立てた。“もう一度とこんな過ちは繰り返させない”と。手始めに人類はその技術を再び戦争の道具にしないために生きるための道具として扱うこととした。そしてこれから世代で自分たちの志を絶やさせないために子や孫に“The End”が招いたこの世の終わりを何度も繰り返し教え続けた。

再び痛みを知つた彼らの志は次の世代の人々へと引き継がれていき、その次の世代へと続いていった。人類はついに争いのない共存の日々を再び手に入れることができた。全ての役割を果たした彼らはこの平和がいつまでも続くよう祈りながら大地へと消えて行つた。

しかし、そんな願いもむなしく時という名の風によつて努力の火

が吹き消された。

“The End”終結から500年、まだその爪痕を残したま  
まだ、人類の生活が安定して来たこの時代、人類は生きるために  
使っていた技術によつて再び争いの規模が拡大しつつあつた。それ  
はまるで、軍事技術が本来の機能に戻るかのようである。

完全な平和を取り戻すためにはそれ以上の痛みを彼らに与えなけ  
ればならないのだろうか。人類に再び争いの世界が包み始めた。

## プロローグ1（後書き）

この回は僕が高校生時代から練りに練ったものです。SFというジャンルで読者に共感を与えるためにできるだけ現実的にかつ大胆なものにしなければなりませんでした。これからは本編に入って行き、この作品の世界を広げていきたいと思います。

## プロローグ2

熱い！

辺りはビルが炎に包まれ、点に吸い込まれるかのように高く伸びていた。それら一本一本が僕には見覚えのあるものだったがもはやその面影は消えていた。今まで懐かしんでいたこのにおいも今ではモノが焦げたにおいに変わり果てていた。

僕は必死に逃げた。しかし、逃げても、逃げてもその先に見えるのは火柱が昇るまさに灼熱地獄。でも、そんなことはすでに知っている。今までにもう何十回も同じものを見ているんだから。では、なぜ逃げているのだろう？

何から逃れようとしているのだ？

そんな疑問すら熱さのせいか考えられなかつた。ただただ必死に逃げていた。そして、この夢の続きを知っているのに僕は必死で走っていた。本当は見たくないのに。

火の海しかないはずの向こうに一人の人影を見つけ僕は立ち止つた。顔が見えなかつたが10歳前後の少女に僕は見えた。ぼろぼろで色あせた黄色いワンピースを着たその少女は両膝を抱え泣いていた。その泣き声は僕の心にキリキリとえぐるように響いてくる。知つてている。

僕はこの子を知つている。

守らなきや、守らなきや。

なぜ？

この子をこれ以上悲しませちゃいけないから。

何から？どうやって？

わからない。

わかるはずもない。僕は、僕は…。

気が付くと炎は彼女の近くまで迫っていた。その炎はまるで生きているかのようにじわじわと今にも彼女を襲いかかるかのようにゆら

ゆらと揺れ動いていた。

いけない。

僕はとつと前に出て、

“泣くな。一緒に逃げよう！” そう叫んだ。はずだった。

少女は泣きじやくつたまま反応しない。

聞こえないのか。

違う。

声がないのだ。何度も、何度も叫び続けようとしたが空氣しか出なくて声にはならなかつた。身を乗り出すはすが、こちらも全く反応しなかつた。まるで、自分の体が自分のではないかのようにただ突つ立っていた。さつきまであんなに走つていたのに。肝心な時に何もできないことに僕は腹立たしく思つた。

そうしていろいろうちに膝を抱えた少女はいつの間にか遠ざかっていた。立つて歩いたわけではない。依然として膝を抱えたままである。もう彼女の近くに炎が来つていて、今にも彼女の髪の毛の焦げたにおりが漂つてしまつた。

おい！ 行くな！ 危ないぞ！ 行くな！ - 最後の力を全て振り絞つて叫んだつもりだつたが、相変わらず声は出なかつた。

やがて少女はこの世界を呪うよつな泣き声を残しながら炎の中へと消えていった。

その声に僕は胸がぐぢやぐぢやにつぶされていくようであつた。

苦しい。

逃げ出したい。

この苦しみから逃れたい。

僕は泣いた。声は出ないけど、腹の底から叫びあげながら泣いた。

それが苦しみから逃れるための手段であるかのように。そして、頭の奥から何かが響いてくる。

この子を守ると誓つたのに、

彼女の恐怖を薙ぎ払つたのに、

そして・・・。

泣きながら服に火が付いているのに気づいた。

別に熱くなかった。匂いも別に気にしなかった。

た  
た  
泣  
い  
た

今の僕は向先...向先できないままなんだ。

僕は一人自分の無力さを呪いながら絶望という名の炎に包まれていった。

• . . . .

耳に響く「こつむさい」音に気付き僕は目覚めた。

ギィギィ、と不快な音を出すベッドだつたがほつとした。ここが現実であることが確認できたからだ。ぶるつと体が身震いした。汗が出ている。こここの壁によつて室内の温度は外気の温度に比べだいぶ緩和させているが、それでもここは寒かつた。しかし、それなのに汗をかいていた。しかし、おかげで目が覚めだ。

僕はベッドから起き上がり周りを見渡しながら昨日の出来事を想い出した。

旅の途中で燃料と食料の底が尽きた僕はこの街へ立ち寄った。そして親切にもここに住んでいるおばさんが泊まるよう勧めてくれたのだ。そして僕はまた見たんだ、あの夢を。

僕は窓を見つけその方へ向かつた。

これは僕の朝の習慣で、あの夢を見ると不思議なことに次に向かうべき方向がわかるのだ。夢の中にいた少女の遠ざかった方向がそれだ。最初は單なる気まぐれでそれに従つて旅を続けた。どうせ、いつか見なくなるだらうと思って。しかし、まるで縛り付けられていくかのようだ。僕はそれからも毎回、毎回あの夢を見る。しかも毎夜見る度に彼女の遠ざかる方向がまちまちなのだ。いつしかその夢は僕にとって信じてみる価値があるようと思えた。一体何を信じているのか、夢を信じているのか、それともその先を信じているのか、それはよくわからない。だが今の僕は、そのお告げのような夢を頼

りにここまで旅をしてきたのだ。

今ではほとんど何も考えていない。進路は夢にまかせっきりで泊まる場所と食べ物だけを考えていた。しかし、頭の片隅でそのお告げを啓示する者が泣いている少女というのが引っかかっていた。何度も思い出そうとしたが、その都度、体が異物を拒むように思考が急に停止した。今はそれを諦め、考えないようにしようと思っている。この旅の終点でそれがわかるだろうと僕は思っているから。

窓を開け今朝の夢で僕に示した方角を覗いてみる。

窓から顔を出した瞬間、冷たい風がビュー、ビューっと耳にさわさわき、冷たい感触が頬を掠める。この砂漠の世界では日中は40度を優に超える灼熱地獄だが、夜になると気温は氷点下にまでさがる。今も氷点下5度くらいだろうか。毎日この行動をしているためこの冷たさにはもう慣れれている。

いくつもの家々が立ち並び、小さな風の音が耳に響くだけでまだ辺りを静けさが包んでいた。この音を聞くたびに僕の心は和んだ。このにおいをかぐ度に空気の新鮮さを感じられた。しかし、同時に僕の心に孤独感を感じずにはいられなかつた。

地平線の向こうからほんのりと明かりが灯し始めているのが見えた。目を凝らして凝視すると夜明けの太陽の前に果てしなく続いている砂の大平原が家々を包み込むかのように広がつていた。

ヘルツシユ砂漠、この街の人たちはそう呼んでいた。なんでも、その向こうに盜賊や過去の戦争 “The End” によって突然変異した生物 アンダーワームがいて、毎年行方不明者が絶たない危険な砂漠なのだそうだ。

でも、そんなことはどうでもいい。なぜなら、僕は・・・

ピピピピ...

急に電子音が腕から鳴り僕は我に返った。僕は電子音を止め、時間を見た。そろそろ時間だ。

僕は置手紙を書き、外に止めてある自分のバギーに乗った。太陽からのソーラーエネルギーによってモーターは砂上戦艦並の馬力を発

揮するという”The End”からある負の遺産の一つだが今のこの世界では多くの人類が利用する砂漠の必需品だ。

バギーの中はかなり寒かった。一晩中外に置いたままだつたから当たり前か。僕はバギーの専用カードをスライドさせ、スタートボタンを押す。静かにモーター音が車内に響いた。しかし、どこか凍つていたのか音の調子が良くない。そのためかモーター音は獲物を狙う獣の唸り声に聞こえた。少し焦りすぎたかと僕は思いながら座席でエンジンが温まるのをじつと待つた。いきなり動かすとエンジンに大きな負荷がかかりエンストを起こしかねない。本当なら日が昇つてしまはらくしてからの方がすぐに動かせるが、今は先を急ぎたい。今は待つしかできなかつた。

僕は後部座席の方を見て保温性の高い瓶に入れてあるコーヒーを見つけ出した。一晩中そこに置いといたのに瓶のふたを開けてみるとそこから暖かな湯氣が立つていた。瓶についてあるカップにコーヒーを注ぎ入れ、ゆっくり飲み始めた。体中に温かさが染み付いて行くを感じた。僕はコーヒーをカップで2杯飲んだ後、瞳を閉じてモーターの音を聞いた。ウイーという回転音が耳の奥に響きわたり、雑音は全くしなかつた。そろそろ温まつてきたな。そう判断した僕はハンドルを握り、アクセルを踏む。バギーは豪快に砂を蹴り、道路を疾走する。

家々が並び立つ居住区を抜けるとそこはメインストリートである。まだ早朝前そのためストリートには大型のトレーラーしかなく、バギーは僕のしか走つていなかつた。ストリートを走りながら僕は右側の建物に目を移した。2階建ての店がまだシャッターを閉めてままで立ち並び、で夢に出たあの大きな建物は一つも見当たらなかつた。唯一大きな建物があるとするなら、街の中央にあるシンボルタワーしかない。その名の通り街のシンボルとして建つており、砂漠の旅人たちが遭難した場合に備えて灯台のような役割を果たしている。そのため、そこだけ他の建物に比べかなり高く、シンボルタワーの頂上は今もライトで光り続け、僕のバギーの上を何度も光の筋が通

つた。僕が向つて いる方角は ほぼ 南東である。当然、僕が向つのは  
ヘリッ シュ砂漠だ。危険 という言葉が 胸の奥に響いたがなにも恐れ  
ることは なかつた。

だつて、その向こうに僕の求めて いるものがあると信じて いるから。  
太陽が 左の方から 昇つてきた。時刻は もうそろそろ 朝の目覚めを告  
げようとしていた。

## プロローグ2（後書き）

いかがだったでしょうか？次回、いよいよヒロインが出ます。お楽しみに！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2434m/>

黄昏のクロス・ウォーリアー～彷徨う旅人～

2010年10月8日21時51分発行